

学習院アーカイブズ ニューズレター

19

Gakushuin Archives Newsletter 2022.2.25 vol.



百周年記念会館建設工事 1978(昭和53)年

百周年記念会館は、学習院百年記念事業計画のうち、教育・研究施設の整備の一つとして建設された(鉄骨鉄筋コンクリート造4階建)。1978(昭和53)年9月30日に完成し、10月18日には、天皇・皇后両陛下ご臨席のもと、学習院創立百周年記念式典が挙行された。ちなみに、左側の白い高層ビルは、同年4月に開業したサンシャイン60である。

(『学習院広報』掲載用の写真か、学習院アーカイブズ所蔵)

Contents

アーカイブズからアーカイブズ学へ

学習院大学文学部史学科 教授 千葉 功 2

コラム 小さな扉の物語 — たてものいまむかし —

学習院アーカイブズ 巽 麻希子 3

なぜ「私立」か — 宮内公文書館所蔵資料の紹介 —

学習院アーカイブズ 桑尾光太郎 4

学習院アーカイブズの10年、これから — あるアーキビストの視線 —

学習院アーカイブズ 小根山美鈴 6

主な活動 (2021年7月～2022年1月) 8

アーカイブズからアーカイブズ学へ



学習院大学文学部史学科 教授 千葉 功

アーカイブズとの出会い

私は、いままでの研究人生の節目ごとに、良きアーカイブズに出会ってきたと思います。

大学3年生になって演習（ゼミ）が始まり、最初の発表のためにゴールデンウィーク明けですぐの5月中旬に、チューターとしてつけられた留学生の崔碩莞さんに連れられて、初めて行ったアーカイブズが国立国会図書館憲政資料室でした。いま「アーカイブズ」といいましたが、公文書の簿冊ではなく、近代日本の政治家や官僚などの家に残された私文書（書簡や書類など）が中心となります。

憲政資料室へ本格的に通うようになったのは、大学院に入ってからのことでした。卒論では、当時の「日本新党」ブームにあやかっただけか、大正政変の際に桂太郎が立ち上げた「桂新党」を取り上げましたが、まったく納得のいかない不完全なものに終わってしまいました。大学院に入ってから別なテーマにしようとして、一時は地方改良運動を研究しようかなとも考えたのですが、先行研究の厚い壁を乗り越えられるか自信はありませんでした。仕方がないので、そのうち何か思いつくかもしれないと、卒論でも使った「桂太郎関係文書」（憲政資料室所蔵）にある桂あての書簡を一通ずつ読んでいきました。そうこうして、日露戦争の開戦外交にテーマが定まりました。

大学院の修士課程のときは、日露開戦外交といっても憲政資料室へ通って政治家間の書簡のやりとりをおっかけていったので、外交文書は刊本（『日本外交文書』）ですませてしまいました。しかし、博士課程に入ってから「外交史」そのものを考える必要が生じ、それには外交史料館が所蔵する公文書の「外務省記録」を見なければいけません。当時は、政府系のアーカイブズ（国立公文書館・外交史料館・防衛庁防衛研究所図書館）がインターネット上で見られるデジタル・アーカイブ「アジア歴史資料セン

ター」は始まったばかりで、ほとんど使い物にならない時代だったので、実際に外交史料館へ足しげく通う必要があったのです。

大学に就職して、学習院へ移ってきて

そのあと、大学（昭和女子大学）に就職して、アーカイブズとのつきあい方も少し変わりました。院生のときのように毎日通うことは無理にしても、できるだけアーカイブズへ行こうとはしてきました。特に、桂太郎あての書簡を翻刻した『桂太郎関係文書』、それと対になる桂が発信した書簡を翻刻した『桂太郎発書翰集』を編纂する際には、「桂太郎関係文書」を所蔵する憲政資料室、「桂太郎関係文書」の一部で散逸したもの（「桂太郎旧蔵諸家書翰」）を所蔵する早稲田大学中央図書館特別資料室、さらに『桂太郎発書翰集』は桂が書いた書簡の方なので、あちらこちらのアーカイブズへ史料の所在調査と閲覧・複写のために出かけました。そういえば、どうしても日程の関係で、鳥取県立博物館へ日帰りで行って帰ってきたこともありました。

さらにそのあと、学習院大学文学部史学科に移ってきてからも、アーカイブズとのつきあいはもちろん続きます。

近年、私が力を入れているプロジェクトが、『寺内正毅関係文書』（全5巻予定）の刊行です。これは、憲政資料室所蔵の「寺内正毅関係文書」に加えて、近年（2012-13年）発見され、現在は山口県立大学図書館と学習院大学史料館とで分散所蔵されることになった新出の寺内正毅関係文書を統合したうえで、寺内あての書簡を悉皆翻刻しようとするものです。その作業の過程で憲政資料室へはよく行き、山口県立大学図書館へも何回か行くことになりました。このプロジェクトは、現在進行形のもので、

また、大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻の安藤正人先生からの依頼で、アーカイブズ学もど

きの文章を書くために、外交史料館へ集中的に行くこともありました。

アーカイブズからアーカイブズ学へ

さらに時は過ぎ、2017年度は長期研修をいただいて、イギリスに10日間を2度ほど行く機会がありま



The National Archives

した。Parliamentary Archivesという文字通り議事堂の中にあるアーカイブズへ行くのに、ライフル銃を下げた人にボディ・チェックをされて、趣のある木の壁で覆われた部屋へ案内されたのも印象深い思い出です。また、キュー・ガーデンにあるThe National Archivesにもできるだけ行きました。小中学校の先生と思われる人が生徒を引率して館をまわっているのを見て、アーカイブズというものが社会に自然ととけこんでいるのにいたく感心しながら帰国しました。

そして、翌2018年度から、御退職された高埜利彦先生に代わってアーカイブズ学専攻を兼任することになりました。今までその重要性は承知していながら、怠惰なために見て見ぬふりをしてきた「アーカイブズ学」に真正面から向き合う必要性をつきつけられ、今度こそ「アーカイブズ学」を学ばなければと痛感する日々です。

コラム 小さな扉の物語 一たてもものいまむかしー

学習院アーカイブズ 巽 麻希子



『学習院大学新聞』第146号(1999年1月11日)のコラム「素朴な疑問 開かされる扉の謎」は、北1号館2階の外壁にある、どこにもつながらない不思議な扉に注目している。

その扉は、過去に存在した校舎と北1号館が渡り廊下で繋がっていたなごりであることが判明し、「あの扉は時代に取り残されたということか。そう思って見ると、扉はちょっと寂しげだ」と記者は記している。

過去に存在した校舎とは「本部棟」で、1983年撮影の写真(右上)では北1号館と2階部分が渡り廊下で繋がっていたことが確認できる。本部棟と中央教室(通称ピラミッド校舎、2008年解体)・北1号館・南2号館は、前川國男設計による1960年完成の校舎群で、本部棟を中心に各建物が渡り廊下で繋がっており、まさにワンキャンパスの精神を象徴していた。ただし写真のように北1と本部棟の2階をつないだのは1982年の改修時で、その後本部棟は1991年に解体され、1993年に法学部・経済学部教育研究棟(東2号館)が建っている。記事が目にした扉が扉としての機能を



果たしたのは、10年足らずだった。

せつかなので、2022年の扉の状況を確認してみようとカメラを持参し現場へ向かう。……あれ？扉がない！塞がれたような形跡はあるものの、いつ塞がれたのだろうか。

四季折々の風景が楽しめる目白キャンパスではあるが、建物の移り変わりにも目を向けると意外な発見がありそうだ。



なぜ「私立」か —宮内公文書館所蔵資料の紹介—

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1945（昭和20）年12月、それまで華族子女の教育を目的とする宮内省所管の教育機関であった学習院と女子学習院は、学制を改正して華族の教育をその目的から外した。要するに一般の学校となったわけであるが、となると華族の監督官庁であった宮内省の所管である必然性はなくなる。翌1946（昭和21）年の1月から2月にかけて、GHQは皇室財産の処理問題に関連して両学習院の宮内省からの分離を示唆していた。

宮内省は学習院を分離して私立学校とする方針を固め、1946年2月14日付でCIE（GHQ民間情報教育局）に提出した文書「学習院基金増額に関する説明」には、「学習院は将来、之を宮内省より切り離し独立させる予定である（中略）学習院が将来学習院基金よりの収入、宮内省よりの補助金、及社会よりの寄付金で経済的独立の基礎を得て独立し、一つの私立学校として外部の干渉を受けずに教育を続けて行くことを宮内省は期して居る」と記されている。2月20日には長澤英一郎学習院高等科長がCIEのマクアレン少佐を訪問し、学習院を財団化する計画であることを伝えた。さらに4月3日に開催された学習院評議会会員懇談会において山梨勝之進学習院長・下村寿一女子学習院長より、学習院・女子学習院が近く独立して財団法人組織となるが、維持経営は相当困難になるとの見通しが報告されている。

その後、財団法人化に向けての宮内省からの皇室財産（学校資金・不動産）の下賜がいったんGHQに否認され、山梨院長をはじめとする学習院・宮内省側とCIEとの折衝が続けられた。1946年12月ようやく皇室財産の下賜が認められ、学習院・女子学習院は翌1947（昭和22）年に財団法人学習院として独立し、私立学校としての一步を踏み出した。しかし承認された下賜金は要求額を大きく下回り、折からのインフレも重なって学校経営が苦難の連続であったことは周知の通りである。

そこで改めて「学習院はなぜ私立学校となったか」である。両学習院が宮内省から分離して存続するた

めには、財団法人を設立し私立学校となるほかに、官立学校（1947年から国立学校）のまま文部省に移管する選択肢もあったように思われる。文部省に移管されていた方が、その後の経営難も軽減されていたであろう。両学習院と同じく宮内省の所管だった皇室博物館は、1947年に文部省に移管されて国立博物館（現東京国立博物館）と改称している。こうした疑問は、1990年代に自分が大学五十年史編纂を担当することとなって、学習院の歴史を学び始めて最初に抱いたものである。

学習院百年史編纂のために1975年に行われた座談会では、司会役の安田元久編纂委員会委員長が同様の質問を述べていて、これに対し1946年当時学習院に在職していた櫻井和市や児玉幸多は、下記のように答えている。

安田 [元久文学部教授]

大学ができる前の、私立にするか国立に移管するかという時代に、国立に移管する可能性は充分あったんですか。

櫻井 [和市院長・1946年当時学習院教授]

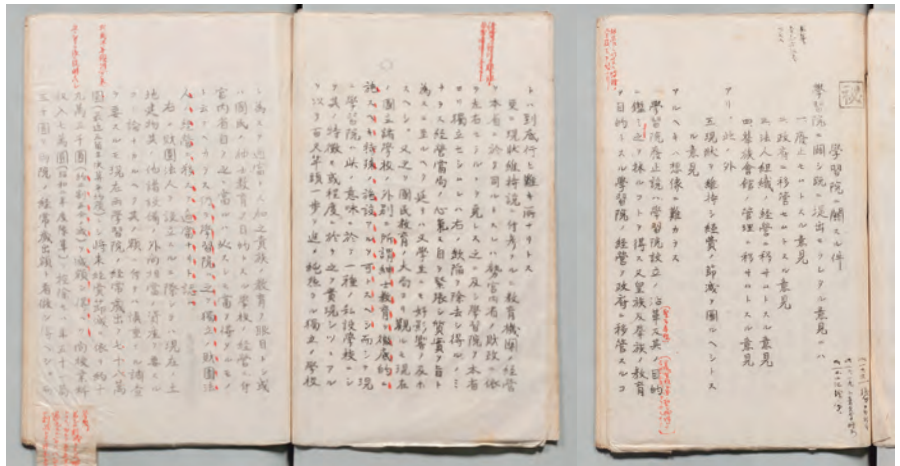
そこまでは働きかけなかったけど、やればあったんです。

児玉 [幸多大学長・1946年当時学習院教授]

つまり、むこうの、—GHQ—というか進駐軍—というか知りませんが—の要求で、学校は要するに文部省に一括すべきだと言うことで、各省で作っておったのを全部集めたんです。（中略）宮内省の持っていた学習院も、文部省に移そうと思えば、それは可能性あったわけです。それは、さっき院長が言われたように、学校の非常に重大な問題でしたから、非常な議論があったわけですね。それで、結果としては、富永 [惣一・1946年当時学習院教授] 説だけではなかったかもしれないが、独自のものをやっていくためには、私立でなければということ、私立になったことは確かですね。（中略）

櫻井 宮内省から離れてどうするかという点です

ね。私学になるか国立に移管するかということはかなり議論をしました。そして、富永君等は、学習院の昔からの自由な行き方を残すためには、国立なんかにしたんじゃだめだから私学にして……、という考え方が強かった。（「大学文学部座談会」学習院アーカイブズ蔵 1975年）



【秘】学習院ニ関スル件

「私学になるか国立に移管するかということかなり議論」が行われた時期については判然としませんが、宮内省や学習院幹部、GHQの間だけでなく教員の間でも、「自由な行き方」という学校の特徴を残すためには私立学校としての存続が望ましいと考えられたことが示されている。児玉・櫻井・富永といった教員は元来宮内省に属するいわば国家公務員であったが、あえて地位の安定しない私立学校の道を選び、教育の中核をになった。

また、財団法人化の方針が宮内省内部で1946年早々に固まっていた背景について、そのヒントとなりそうな資料がある。2009（平成21）年に宮内庁宮内公文書館が設置されて所蔵公文書の公開が開始されたため、同館所蔵の学習院・女子学習院文書の調査を行っていたところ、「昭和二年事務調査会（博物館・学習院・官制等改正関係）」（識別番号93001）という名称のファイルに綴じられた、下記の文書「【秘】学習院ニ関スル件」を発見した。

学習院ニ関シ既ニ提出セラレタル意見ニハ

- 一、廃止セムトスル意見
 - 二、政府ニ移管セムトスル意見
 - 三、法人組織ノ経営ニ移サムトスル意見
 - 四、華族会館ノ管理ニ移サムトスル意見
- アリ。此ノ外
- 五、現状ヲ維持シ経費ノ節減ヲ図ルヘシトスル意見アルヘキハ想像ニ難カラス

学習院廃止説ハ学習院設立ノ沿革及其ノ目的ニ鑑ミ之ヲ採ルコトヲ得ス、又皇族及華族ノ教育ヲ目的トスル学習院ノ経営ヲ政府ニ移管スルコトハ到底行ヒ難キ所ナリトス。

更ニ現状維持説ニ付考フルニ、教育機関ノ経営ヲ本省ニ於テ司ルトスレハ、勢宮内省ノ財政ニ依

テ左右セラル、ヲ免レス、之ニ反シ学習院ヲ本省ヨリ独立セシムレハ右ノ欠陥ヲ除去シ得ルノミナラス、経営当局ノ心気モ自ラ緊張シ質実ヲ旨ト為スニ至ルヘク延テハ又学生ニモ好影響ヲ及ホスヘシ。又之ヲ国民教育ノ大局ヨリ観ルモ現在ノ国立諸学校ノ外別ニ所謂紳士教育ヲ徹底的ニ施スヘキ特殊ノ施設アルヲ可トスヘシ、而シテ現ニ学習院ハ此ノ意味ニ於テ一種ノ私設学校ニシテ其ノ特徴モ或程度ニ於テ之ヲ実現シツ、アルヲ以テ、百尺竿頭一步ヲ進メ純然タル独立ノ学校ト為スヲ適当トス。加之貴族ノ教育ヲ眼目トシ、或ハ国民ノ紳士教育ヲ目的トスル学校ノ経営ニ付、宮内省自ラ之ニ当ルハ必スシモ当ヲ得タルモノト云フヘカラス。仍テ学習院ハ之ヲ独立ノ財団法人ノ経営ニ移スヲ適当ナリト認ム（適宜句読点を補充）。

「昭和二年事務調査会」ファイルには、ほかに「学習院事務整理に関する件」「女子学習院事務整理に関する件」ほか経費に関する文書が多数綴じられ、各文書には修正や余白の書き込みが多数施されており、宮内省官僚の手元にあったファイルと思われる。詳細は今後の研究・分析を待たなければならないが、主に経費上の理由から学習院の宮内省からの分離・財団法人化を提案しようとした内容である。これらの文書は、同じく宮内公文書館に所蔵される「学習院評議会録」等の簿冊では存在を確認できず、財団法人化構想は、上部の会議には諮られなかったものと考えられる。

こうした宮内省内部で検討された経験が何らかの形で引き継がれ、敗戦直後の混乱の中で財団法人化への意思決定が迅速に進められるに至った可能性はあり得る。今後宮内公文書館所蔵文書と学習院所蔵文書との比較を含めたさらなる研究が求められる。

学習院アーカイブズの10年、これから

—あるアーキビストの視線—

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. はじめに

学習院アーカイブズは2011年4月、院長直轄の法人事務組織として正式に発足し、既に10年の時を重ねた。2027年には学習院創立150周年を迎える。学習院アーカイブズは静かに、それでいて大きく変わろうとしている。本稿では、アーキビストの視線から、業務のひとつである評価選別と目録作成作業を中心に、学習院アーカイブズの現在を通して見える過去・未来について綴ってみたいと思う。

2. 評価選別の仕事

—文書ファイル管理簿は大切！

(1) 文書移管について

学習院アーカイブズ（以下「当室」）の前身は総務課管轄の院史資料室である¹⁾。2011年、学習院の事務文書を移管し、保存する機能を有する組織へ改組した。現在の日本における私立学校や企業等においてこのような「アーカイブズ」の機能をもつ所はほんのわずかである。公文書管理法²⁾の適用外であるにもかかわらず、「自主的」にこのシステムにのっとり、独自の取り組みを導入する学習院の動向は、社会的な注目に値すると言っても過言ではない。

(2) 文書ファイル管理簿と評価選別

2014年4月、「学習院文書取扱規程」の改正により、事務部署を対象にした文書移管体制が敷かれた³⁾。先人である教職員達の人智と理解のたまものである。

事務文書の移管のために必要な作業工程のひとつに、「評価選別」の仕事が位置づけられる。移管までの流れに基づく作業について図1に示す。

1から順に見ていくと、業務担当課（原課）は、年度末に当室（文書主管課の所管ではない）へ当年度文書ファイル管理簿の最新を報告する。その流れとは別に、2で原課は保存期間が満了し、廃棄希望の文書のみを集約した文書ファイル管理簿を当室へ送り、評価を依頼する。3から当室による評価選別作業が始まる。まずはリスト上で2名が選別し、4で

原課へ訪問、現物確認しながら学習院にとって将来的に必要な文書かどうかを評価・判断する。その後協議を経た結果、5の廃棄と移管が決定し、廃棄対象の文書は原課が廃棄し、移管対象については「移管暫定措置」扱いとなり、そのまま原課に置かれる。

原課からみれば突然始まったこのルールに大きな戸惑いがあったに違いない。しかし今ではそのルールも根付きはじめており、筆者たちが訪問すると、快く対応かつ、質問にも応じてくださる。



図1：文書の評価選別・移管の流れ
(2020年度保存期間満了文書の例)

(3) 今後の課題

第一に、文書ファイル管理簿が原課に役立っているかという疑問である。文書ファイル管理簿の役割は、一言でいうと仕事を効率よく行なうためのものである。同時に、その管理簿は原課における業務の「証拠」となる記録の集合リストである。その機能が本当に果たしているだろうか（原課のダブルスタンダードを引き起こしてはいないか）。

第二に、評価の妥当性である。現在のスタイル(永久保存以外の文書に対し、一点ごとに評価基準につき合わせて判断する方法)は、必ずしも原課の業務全体を分析した上での評価につながっていない。評価基準と実務の乖離について検討する余地がある。

第三に、「移管」が完了していない点である。当

室の収蔵庫収容問題が最大の課題である。移管が確定されたにもかかわらず物理的な理由で資料を移動できず、誰も関知しないデッドゾーンと化して数年経っている。それは散逸の可能性を否めず、ひいては将来の活用にもつながらないおそれがある。

そのほか、電子文書の扱いや現在の文書移管体制が院全体を対象にできていない点⁴⁾など課題山積である。時間はかかるが一步一步前身したい。

3. 目録作成の仕事—資料の「組織化」と「体系化」

(1) 目録作成とは

目録作成は、記録を位置づける大事な仕事でありながら、第三者に見えない地道なものである。

アーカイブズとは、①組織または個人の活動に伴って作り出される文書のうち、重要なものとなる記録、②それらを将来のために保存する機関・組織を指す。これらの記録（アーカイブズ資料）は紙の文書に限らない。図面や写真、音声・映像記録、デジタルデータ、そしてたとえば学習院で作られる記念品などもその内容に含まれる。

アーカイブズ資料の特徴は、組織の活動の結果として生み出されたものであり、それは概して「文書のまとまり」で構成されることである。アーキビストには、それらに真正性があるかどうかを立証すること、出所をたどって文書が作成されたプロセスの中に位置づけることが求められる。目録はこの過程を経て資料を利用可能にするための検索手段である。

(2) まずは当室所蔵資料の目録—鋭意作成中！

当室では、昨年度より所蔵資料をこの視点（出所の原則や原秩序の尊重などの原則）で編成する方法に切り替えた。大きく2種—①学習院という組織が作成し、かつ出所となる文書のまとまり（資料群）、②個人や関係団体によって作成され、寄贈あるいは

収集された資料群—に分け、その中で文書のまとまりごとに概要目録を作り、さらに1点ごとの目録を作る2段階手法である（図2）。これらの目録の属性項目については、アーカイブズにおける国際標準の記述に基づく。

(3) 今後の課題

第一に、目録作成は理想と現実のはざまにある点である。当室の前身は院史資料室だった。過去の院史や大学史編纂によって収集、作成された資料の蓄積が当室を支えている。それらの中には編纂過程で収集した資料を、もとは組織の活動によって生み出された記録から「切り離し」、編纂用に扱いやすい分類に「仕分け」してしまったものもある。

第二に、移管暫定措置文書の目録作成が手つかずの状況である。しかしこれらの目録作成時には、現在の手法が有効になるだろう。

第三に、組織の機能・業務分析が未熟なことである。文書の作成主体についての情報が体系的にまとめられていない。明治期から調べるには気が遠くなるが、模索しつつ少しずつ取り組んでいる。

4. おわりに—学習院のアーカイブズとは

足早になったが、本稿ではあくまでも当室の活動に限定する内容となった。院内各学校で行われている資料保存への取り組み⁵⁾についても、積極的に関与できるような成熟した組織に成長すれば、「学習院のアーカイブズ」はより発展していくだろう。

アーカイブズとは、第一義に組織のためのアーカイブズである。当室の資料は当室のものではない。学習院の財産である。あらゆる人々が知見を深めたり、教育に利用したり、歴史を叙述したりする、そのような様々な資料の活用に対応できる学習院アーカイブズを目指したい。



図2：概要目録の1シート（左）とアイテムリスト（右）
（筆者の前職である東京大学文書館の手法を参考にした）

- 1) 桑尾光太郎「学習院アーカイブズの設立まで」(12号、6～7頁)を参照。
- 2) 「公文書等の管理に関する法律」の通称。2009年法第66号
- 3) 学習院の文書移管体制については以下を参照。長岡修司「文書ファイルの整理・管理について—組織アーカイブズの事務部署における展開—」(2号、6頁)。同「文書ファイルの整理・管理について—現況報告—」(5号、7～8頁)。井上素子「文書ファイルの整理・管理について—現況報告—」(9号、7頁)。
- 4) 現在の体制は事務職員を置く部署に限るものなので、事務職員を置いていない部署等への対応が急がれる。
- 5) 女子中・高等科の取り組みについては以下を参照。延智子「女子中・高等科史料室の現状と課題」(5号、3～4頁)。

主な活動 (2021年7月～2022年1月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別 (17部署 (重複含む))

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

- ①初等科所蔵資料 (7月、12月)



初等科土俵開き (1953年)

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③自動演奏ピアノの維持管理

◆資料等のデジタル化

- ①1970～1980年代ポジフィルム
- ②山梨勝之進文書
- ③輔仁会会報 (昭和20年)
- ④三島由紀夫神崎陽宛書簡 (昭和20・21年)

◆資料受入れ

- ①大礼奉賀献上写真帖 (大正4年発行)
- ②亀井茲常宛封書
- ③学習院祭パンフレット他



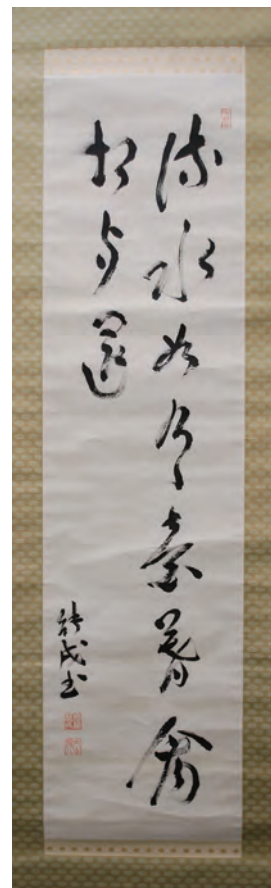
学習院祭パンフレット

新歓、大学祭、中高等科祭
パンフレット

- ④安倍能成筆軸 2点

「流水如有意 暮禽相与還」

「流水 意有るが如く
暮禽 (ぼきん)
相与 (あいとも) に還る」



「清風明月」

◆講演会、教育・広報支援等

- ①学習院桜友会設立100周年記念式典への写真提供
- ②京都市歴史資料館特別展「岩倉使節団150年記念「岩倉具視と米欧回覧」」への写真提供
- ③講演会「前川國男と学習院大学」(9月18日文学部フランス語圏文化学科主催)への協力

学習院アーカイブズ・ニュースレター第19号
2022 (令和4) 年2月25日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>